

掘り起こした中国語教育文献の研究

—旧「満州」における日本人の中国語検定試験について

李 素楨・田 剛

小序

周知のように、1972年から日中の国交が正常化していたとは言え、中国が真の改革開放を行い、世界に向かってドアを開いたのは80年代からである。すなわち、左翼的な政治思潮から人々は解放され、改革開放の波は学術研究を新しい領域に導いたのである。その時から「政治敏感」で触れることの出来なかった問題にも触れることができるようになった。筆者はそのような背景のもとで、旧「満州」における日本人を対象としての中国語学教育、特に中国語検定試験の研究を始めた。

旧「満州」における日本人の中国語検定試験についての先行研究は極めて少ない。拙稿「旧満洲時代における日本人の中国語検定試験について」（2003年12月、東アジア教育文化学会・第六回中国重慶国際学術会）を発表した際に、「当時、日本人に対する中国語検定試験が行われたのは事実ですか？」という質問を受け、これまでの学会でこの種のテーマが取り上げられることがなかったことを筆者は実感し、中国語教育文献を掘り起こし世に被露することは必要だ、と思った。これが本論文を発表する目的の1である。その2は、実証史学の方法で旧「満州」における語学教育の実態を解明する。其れにより、日中両国の認識の一致点を見出し、日中の平和友好に寄与したいと思う。

なお、掘り起こした資料の国籍所属は、生きている日本人の体験者の口述文献は、日本に所属するのは当然なことであるが、問題は以下のことであろう。

旧「満州」は中国では「偽満州」と呼ばれ、「偽」という語を付けたために、その時代の歴史文献は大変複雑な様相要素を呈している。例えば、ある文献は中日両国語で構成されており、あるいは、多くの文献は日本人が中国において創刊、

出版した雑誌、著作である。その文献の国籍所属の判定には、中国の文献の遺失とするか、日本文献の遺失とするかという問題がかかわってくる。筆者の考えでは、いかに判定しても文献図書は全人類共同の文化財産であるため、経済のグローバル化により文化意識が改革開放されている今日、日中両国に埋もれた文献、図書館に点在している資料、生きている体験者の思い出などを調査、整理、残すのは、目の前に迫っている課題である。なおこの場を借りて、以下の「欠号」や「不明」の資料を補ってくださるよう呼びかけたい。

1、文献散逸の原因

図書文献散逸の原因は天災、人為的の二種類に分けられる。戦争、火災などは天災に属し、焚書、禁書、盗書などは人為的なものに属する。

多くの研究者が歴代の文献書籍の散逸問題について研究している。近代の陳登原氏は『古今典籍聚散考』の中で、書齋存亡の原因「四厄」（四つの悪運）について次のように述べている。(1) 独占者の独断による集と散；(2) 人為的な不蔵による集と散；(3) 戦争や盗難による集と散；(4) 蔵書者の少数による集と散。中国古代の典籍の存亡を振り返ってみると、大体この「四厄」との状態である。

焚書と異形等質的なものとして歴代の禁書政策があった。文字通り「禁止された」書籍のことである。当然ながら、流通も許されず、再版と翻刻や、写しなども許さず、時間が経つにつれて自然に遺失してしまったわけである。陳登原氏の『古今典籍聚散考』、安平秋、辛培恒主編の『中国禁書大観』の中で禁書の源やその影響について、詳細に書いてある。しかし、唯一残念なのは旧「満州」文献については触れていない。旧「満州」文献の遺失ももちろん天災や人為的な災難を免れず、まさに「四厄」を兼ねているわけである。そのほかに、もう一つ補っておくべき事は、政治的な敏感な問題には触れてはいけないということと「禁書」に近いことである。現代に於ける中国の「反右派運動」、「文化大革命運動」などは旧「満州」時代の研究と図書文献の所蔵と整理を妨げてしまった。筆者の曾祖父は清の末期から旧「満州」時代に至るまで、私塾を開き、家には『満州読本』、『支那語教科書』など本が一杯あった。しかし、文化大革命の際に全部焼かされてし

まった。

そのほかに、筆者が中国東北において旧「満州」時代の文献を調査する際にある不思議なことに出会った。ある図書館では館内の「人手不足」という理由で大量の旧「満州」時代の図書を「死庫」（閲覧できない）に投げ入れ、いかなる読者にもその書籍の閲覧を拒んだのである。筆者はこのような現象について大変憂いを感じている。というのは、長年の閉庫により、書籍は腐敗し、まさに「禁書」に等しいものになってしまうからである。同じくもう一種の「禁書」に等しい現象がある。例えば、ある図書館では目録があつて、図書はなく、また、図書はあつて目録がないものもある。これらの現象は研究者にとっては「散逸」に等しい。もう一つの現象は旧「満州」文献が「特蔵」に属し、赤い印判入りの紹介書を必要とするか、「特別閲覧」が必要で、高額なコピー代を必要とされている。このように色々な制限を受けて、部分的な文献は読者から離れられ、「冷宮」に封じ込まれてしまい、「散逸」、あるいは「禁書」とあまり変わらないものになってしまった。以上のような人為的な「禁書に等しい」あるいは「禁書」とあまり変わらない現象を放ってはおけない。筆者の提言として以下のように言いたい。関連ある学界と政府が連携して「散逸に等しい」現象から典籍を救わなければならない。

山本有造氏は旧「満州」書籍文献の散逸は以上の原因の他に、歴史的な原因についても分析している。「第一、敗戦後の引き受けを避けるために、日本側と旧「満州国」側は文献類を焚焼の主な内容としていた。ソ連が参戦した1945年8月20日前後に、満州国政府、関東軍、関東局、満鉄など主要会社の文献を組織的に焚焼したのである。第二、戦後混乱による散逸である。中国に於ける文献の中ではソ連の引き受けについては、今まで言及していない。これに関する記載は大谷武男の満鉄大連図書館に関する記載、大野沢緑郎の満鉄ハルビン図書館蔵書に関する一片の回想などから覗かれるのみである。第三、1946年の冬以後の数年間、寒い冬の間の燃料としても多くの文献が焼かれたのもあり得ることである。そのほか、国共両党内戦中の散逸、解放後、東北図書館から北京図書館への移行などもその文献散逸の原因となる。」

遼寧省档案館副館長趙雲鵬は自分の記憶をたどって次のように述べてくれた。1945年8月8日、ソ連軍が参戦以来、「満州国」国務院から文書焚焼の命令が下つ

た。同時に、満鉄などの重要な部門でも文書の焚焼が行われた。まもなく大連市の档案館、遼寧省档案館所蔵の档案資料も焚焼されてしまった。

加藤豊隆著の『満州国際警察小吏——満州国解体と警察』という本の中でも次のような記述が見られる。「1945年8月10日、関東州において戒厳令が発表され、8月13日、日本政府は天皇の写真を含む一切の重要な書類を焚焼するように命令が下った。」

筆者は当時、大連に在住していた日本人橋本氏を訪ねた。彼女は以下のように振り返っている。「我が家は関東軍司令部に近い所に住んでいた。その頃、毎日その軍隊の門の前を通るたびに、何か紙みたいなものを燃やしていた。しばらくして、その軍人たちはいなくなった。当時、私はまだ子供だったからどうして彼らが紙を燃やしていたかは、判らなかつたが、今から考えてみると、彼らは撤去の前に文書を燃やしていたわけだ。」¹⁾

周知のように、旧「満洲」の植民地教育は敗戦と共に一挙に瓦解し、傀儡政権の「満洲国」も滅亡に追い込まれた。それから中国では共産党と国民党の内戦が起こったり、1949年、中華人民共和国の成立後、次第に「反右派」闘争や、「四清」、「文化大革命」などの政治運動が頻繁に起こった。日本では敗戦のため、「満洲」に関する資料を持ち帰ることが非常に困難であり、その他のいろいろな要因によって、当時の状況を知るための資料が少なく、残った資料の多くも散逸してしまっているのが現状である。

しかし、資料が全く散逸、紛失したわけではない。旧「満鉄図書館」の蔵書を受け継いだ大連図書館、大連档案館（文書館）、東北三省、各市の档案館には植民地に関する資料が残っている。しかし、各図書館や档案館において、資料が未公開で、利用不可能なところがあり、また閲覧はできるが有力者の紹介状が必要であるという閲覧上の問題、あるいはコピー代が高いといった費用面での問題などがある。最も深刻な問題点は、日本でも中国でも、現状では主として、「満洲国」や南満洲鉄道会社、その他の在満企業、機関などが公刊した刊行物、報告書、個人著書などが詳細に分類、整理されていないことである。特に中国の図書館（東北のいくつかの図書館）に収蔵した図書資料は「死庫」と言うほどである。即ち、目録がないままで置いてあるだけで、誰にも見せない状態である。幸せなことに

筆者が某有名大学の図書館地下室のゴミのような誰も手をつけようとしないう「旧書」の中に、一冊の『中国語検定試験問題集』を見つけることができた。これを皮切りに研究の第一次史料の掘り起こしが始めたのである。

筆者は約十年の歳月をかけて、検定試験に関する散逸した資料を掘り起こし、それに関する未公開資料を整理した。また旧「満州」に居住していた体験者（100人以上）をインタビューした。彼らの「体験談」も貴重な歴史資料である。ここで紙面の字数の制限により、本文では主に文献書誌を簡単に紹介する。

2、散逸された語学雑誌

(1) 『善隣』

『善隣』の時代（1930年～1945年）

『善隣』は日本人中谷鹿二主幹による語学雑誌である。創刊昭和五年（1930年）、終刊昭和二十年・康德十二年（1945年）、毎月1日出版、月刊誌であった。出版地は『善隣』の第4年（1933年）8月号まで、当時の「大連市花園町六十番地」、その後引越して「大連市若菜町百四十三番地」であった。

『善隣』の誕生から終焉までの年代を見ると、『善隣』の歴史は大体「満洲国」の軌跡と同じであった。

そのため、当然この雑誌の収蔵は特殊性を帯びた。中国では「満洲国」が滅亡してから国民党、共産党、両党の内戦が始まり、その後「左傾思潮」や文化大革命などにより、この雑誌は今まで誰も手をつけることもなく、50年余り埋もれていたのである。『善隣』は民間の作った雑誌ではあるが、その歴史的な価値は十分にある。

当時、中国語を学び検定試験を受けたかった在満日本人で『善隣』を知らない人はいなかったと言われた。「およそ満州で中国語を積極的に学んだ日本人で、『善隣』を知らない者はあるまい。各種語学検定試験受験者で、中谷氏の問題集を購



「善隣」第4年11号表紙

わなかった者もあるまい。」と那須清が述べた。²⁾

『善隣』の性格

『善隣』は二重性を持っている。政治上、『善隣』は中国東北を占領するのに忠実に服従していたのである。その内容は語学上、複雑に表現されている。純粋な語学研究内容であり、警察の用語、戦争の用語などの植民語学内容でもある。日常に必要な初級から高級までの中国語会話なども載せている。それ以外、刊ごとに、大量な中国語模擬試験と答案、過去問題及びその詳解、注釈などの内容がある。例えば仕事（職種）の内容によって、警察満洲語試験問題、軍事中国語試験問題、職員支那語試験問題などがあり、その問題は四級などのレベルに分けられた。六角恆廣が「支那語研究の指針と題して純然たる語学雑誌の性格を打ち出した。表紙も宮島大八筆の題字「善隣」とした。……内容は、関東州警察官や満鉄職員の中国語試験問題とその解答を適時掲載したのが他の雑誌にない一つの特徴である。その他は中国語の読物と中国語作文をして動詞や形容詞・助詞の使い方、あるいは時文などの解説および中国語にまつわる漫談等々である。全般の印象からすると興味本位の中国関係の内容を編輯しようとする努力が感じられる。」と評論した。³⁾

『善隣』は語学資料として当時、在満日本人の漢語学習及び漢語能力検定試験の歴史を語っているばかりでなく、中国東北が日本の植民地になった日中関係をも証明できる。また東北方言に関する貴重な資料を掲載している。

現在の日中両国における所蔵状況

『善隣』は月刊誌で毎月1日に出版され、16年間続いた。最後の一年、即ち昭和二十年（1945）はたった1冊しか出版されなかった。創刊から終刊まで、全部で約160冊発刊されたと思われる。なぜここで「約」という言葉を用いたかは、



『善隣』第12年9号表紙

第1年から第3年までの『善隣』は今日まで日中両国のさまざまな場所で調査したが全て紛失していたからである。

160冊続いた16年間の内、国会図書館に収蔵されているのはわずか8年分だけである。それは第4年、第5年、第6年、第7年、第8年、第11年、第12年が収蔵されているが、4年4月号—12年1号の中で一年分揃っているものはなかった。次のように第4年1—3、8、10は、第5年2、3、10号、第6年2、4、5、6、9、10、12号、第9年5、8、9、10、11、12号、第11年2、4、5、6、7、8、9、10号、第12年—16年は全て欠号である。もし全部で160冊計算が正しいならば、国会図書館に収蔵されているものは全体の約40%を占めていることになる。

それでは『善隣』誕生の地大連あるいは当時の首都である新京（現在の長春）の図書館の収蔵状況はどうなのか。それもやはり期待に反し、さらに遺憾である。吉林省図書館には全部で24冊、全体の21.3%である。遼寧省図書館には62冊の収蔵で全体の40%である。黒龍江省図書館には13冊、8.1%である。吉林大学図書館には12冊収蔵されており全体の7.5%である。ハルピン市図書館には6冊収蔵、3.8%である。中国東北省、市および、総合大学の研究機関は17箇所あるが、しかし6箇所それぞれが別々に『善隣』を収蔵し一箇所に揃って収蔵されていない。

日本は中国に比べ、収蔵状況が比較的良く、ある大学では第4年—第12年の全刊、第13年第1号—7号の計103冊、全体の64.4%を占め、他の県立図書館は第14年第6号—12号、第15年1号—9号の計15冊、全体の9.4%を占めた。『善隣』が第14年第15年に入った当時、日本の敗戦寸前という状況に紙と印刷の値段が高騰し、『善隣』出版が困難になるという事態に直面し、日中両国とも紛失、欠号してしまったのは当然である。しかし日本は中国より良好に保存されている。中国は第4年、第5年（大連市図書館）第6年（遼寧省図書館）、第7年（吉林省図書館）のたった4年間分だけ揃えている。ただ3か所の図書館に分けられてしまった。

残念ながらそれらの欠号部分を補うことはできず、今後民間の収集家あるいは『善隣』編集者の子孫の手助けなどによって欠号が補われ、『善隣』全巻が揃うことを待ち望んでいる。

『善隣』既刊号在庫品（昭和十七年）

昭和	巻	在庫号数
五年	一	売り切れ
六年	二	3
七年	三	12
八年	四	売り切れ
九年	五	6、7、10、12
十年	六	6、8、12
十一年	七	8、9、10、11、12
十二年	八	3、5、6、8、9、10、11、12
十三年	九	売り切れ
十四年	十	6、7、9、10、11、12
十五年	十一	4、5、7、10、11、12
十六年	十二	1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12
十七年	十三	1、2、3

「満洲」の方言土語を掲載

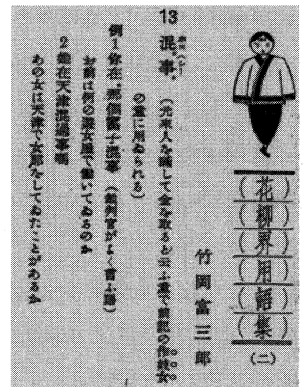
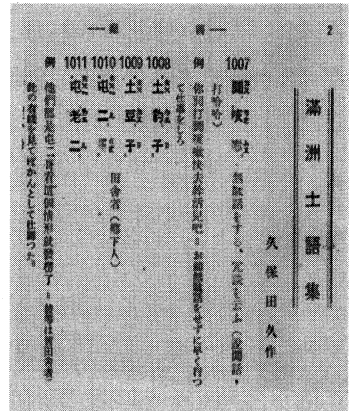
『善隣』第6年（1935）2号から10年間もの長い間、久保田久作の方言資料「満洲土語集」を連載し続けた。

「満洲」で使用された花柳界用語を掲載

前述のごとく、日本支配下の「満洲」という特定の時代に『善隣』は出版されていたので、その中には普段使わない花柳界用語も収録されている。

「満洲」で使用された「隠語」を掲載

旧「満洲」時代、山林に結集して支配者に反抗したり、財物を略奪したりする集団の「土匪」や「馬賊」に使用された「隠語」があった。それは社会方言の一種と見なすことができる。しかしそれらの言葉を記録し、且つ整理した中国



の言語学者は極めて少ない。まして、日本人においては言うまでもないことである。

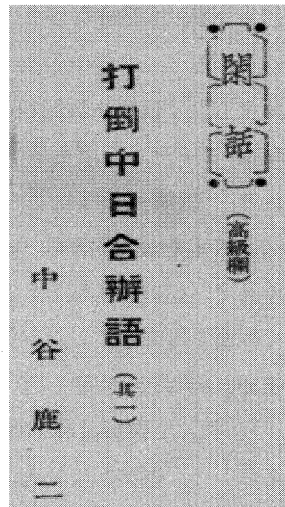
しかし、『善隣』には「満洲一帶の匪賊公用の隠語」が掲載されている。文章はそれほど長くはないが、極めて価値のある資料である。その価値については二つの角度から分析することができる。第一は当時の言語資料としての価値、第二は中日間の政治関係史の資料としての価値である。

「満洲」で使用された「日満合辦語」

『善隣』に掲載された「日満合辦語」においては、「合辦語を打倒せよ」という明確な目的があった。

中谷鹿二は次のように述べている「凡そ世の中で発明された物は少なくない、そして何一つ人類に貢献しないものはない、だのに此『飯々』の発明に至っては、何等役に立つ所がないばかりでなく、反って逆も害になる。即ち、百害あれども一利なしと云ふ一種の障碍物なんである。……『你的一个飯飯看看』、『一番好』、『少々慢々の』だとか此類の所謂『日支合辦語』は實際枚挙に暇なしだか、只餘り面倒だから全部を披露に及ばないだけである。私は今日まで

此種の言葉は大嫌ひである、大正の末年に日支合辦語を打ち倒す小冊子を編纂し、一面機會があれば、一生懸命になつて撲滅に従事して來た、だが、彼等の繁殖力は頗る根強く、恰も匪賊討伐の如うに至難なことである、今日でも未だ私の此『合辦語』を打ち倒す目的は達せられないでいる、けれど私の此目的たるや鐵の如く堅固なものである、よしんば此私が棺桶に片足突込んでも断念することは出來ない、啊々」。⁴⁾



『善隣』の検定試験対策

模擬試験問題を掲載している。その問題数はどのくらいに及んだか、現在考証することはできないが、残っている『善隣』から判断して最低 86 回は出したと

推定される。本研究では現存している『善隣』の中に掲載されている模擬試験に関する一覧表を作成した。

『善隣』の第1年から第3年までは欠号しており残っていなかったが、現存している模試験問題の最も古い題は、第4年1号に掲載している「第6回甲種模擬試験問題解答」と「第二回乙種模擬試験問題の優秀答案」である。この事からみると、主幹中谷鹿二が『善隣』を創刊してまもなく模擬試験問題を考え、遅くとも第2年10号前後から模擬試験欄を設けたと考えられる。『善隣』ではおよそ甲種模擬試験問題35

回、乙種模擬試験問題30回を出している。第9年から甲種、乙種模擬試験を合わせて「模擬試験問題」あるいは「支那語模擬試験」というテーマで86回までの問題を掲載していた。『善隣』はその発行期間16年間においておよそ年に6回模擬試験問題を掲載した。

『善隣』で模擬試験を掲載し、それに対して、多くの読者が答案を『善隣』に応募した。編集部は読者の答案の問題をすべて採点し、点数によって、1等、2等、3等そして「賞外佳作者」に分けた。3等までには賞品があった。「賞外佳作者」の人には賞品はないが、その名前と居住地を『善隣』に掲載することによって、中国語をよく学ぶ在満日本人を励ますことにしたものである。

過去試験問題及び詳解を掲載

『善隣』は、中国語能力検定試験の補習のために、前文で述べた善隣社が独自に出題した模擬試験の掲載以外に、当時四大機関であった関東都督府、満鉄、関東庁、「満洲国」政府が実施した検定試験問題に狙いを定め、さらには満鉄電信電話株式会社、北支憲兵隊、大連消防署、警察官練習所、林業測量員講習会、「蒙古自治政府」などのいろいろな過去試験問題を幅広く収集し、それらの問題をもとのまま手をつけずに掲載した。さらに受験者に参考になるよう、『善隣』

賞		入賞者	
一等	97點	大瀧	松尾 敏實君 (本誌二箇月分贈賞券一枚)
二等	84點	新谷 儀	本村 恒助君 (本誌二箇月分贈賞券一枚)
三等	80點	尾吉 隆	中村 龍君
三等	80點	奉天 德壽	敬守君 (本誌三箇月分贈賞券一枚)
賞外佳作者			
大瀧	池田 大郎君	藤原 多朗	李潤君
大瀧	竹園富三郎君	大瀧 九郎	龍崎君
青島 原 竹夫君		清田 四郎	政盛君

編集部では、それらの過去問題を『善隣』にただ載せただけではなく、解答と詳解を付け加えていた。

『善隣』は出版16年の間に、約200部の過去試験問題を掲載した。一刊ごとに平均一部半掲載されている。その中に『善隣』編集社独自に出題した模擬試験問題、約90部；満鉄検定試験問題10部、関東州庁検定試験問題24部、警察試験問題22部、『満洲国』検定試験問題10部；その他の教師検定、陸軍検定、銀行検定、製鉄所などの会社検定試験問題約50部があった。

『善隣』は多くの過去試験問題を掲載した唯一の雑誌であった。そこにこそ『善隣』の存在意義があった。『善隣』を通じてのみ当時実施された、中国語能力試験のありのままの姿が見られるのである。特に、内蒙古地区漢語検定問題が掲載されており、これは極めて貴重な語学史料である。『善隣』に保存されているもの以外に、他の文献では探し当てることはできない。仮にあったとしてもすべて紛失したであろう。わずかに残るこの5部の問題は、当時も非常に入手困難であった。『善隣』に次のような記載がある。「蒙古聯合自治政府の試験問題は多数読者の要望もありますが、その問題が入手出来ないで打ち切りにしました……。さらに第14年(1943)12号に記載される「康德十年度華北交通株式会社職員語学検定試験問題並解答」、第14年(1943)6号に記載される「天理外语昭和十八年度入試支那語問題と解答」、第15年(1944)8号に記載される「昭和十九年北京日本工商會議所華語検定試験問題並に答案」など、この種の試験問題は多くはないが、今日に確かな情報を示してくれている。当時、中国東北に居住した日本人に中国語能力検定試験が実施されただけでなく、日本の帝国主義勢力が中国東北以外に向けて拡大していくにつれて、中国語能力検定はそれに伴い北京、華北でも行われ、日本にある天理大学の前身、天理外国語専門学校入試でも中国語の試験を実施したことが窺い知られる。



『善隣』第5年5号P16

『善隣』に過去試験問題を掲載したモットーに関しては『善隣』第10年(1939)8号に次のように述べている。

本誌が満洲に於ける各種の支那語満語試験問題及び解釈を登載する意義を明らかにして置き度いと思ひます。本誌は語学専門の雑誌ではあるが試験問題を必ずしも誌上に発表しなくてはならないと言ふ程の義務や責任は固よりないかも知れないが、然し本誌は創刊以来少なくとも満洲に於ける各試験問題は出来るだけ之を誌上に発表し読者と共に之を研究するのを一つのモットーとして来たのである、幸に本誌の愛読者から至大の歓迎を受けてゐるのは決して自画自賛ではない、殊に現下の時局を深く洞察する時支那語満語の重要性は愈々大なるを加えて来る折柄最早弊社では之を以て弊社の負うべき当然の責務であり、支那語普及の大使命の一に数ふべきものであると言ふも敢えて過言にあらざるを痛感するに至つたのである。……多くの試験は問題の傍に答案を書いて提出するので余程実力があつて余裕綽々たる人でない限り只答案だけ書くのが精一杯で、問題を写して帰るなどと言ふことは出来ず大概の受験者自身が問題を記憶してはゐないので後で研究することなんか望まれない。弊誌が此の点に鑑みて試験終了後誌上に之を登載することがどれ位一般受験者を喜ばせ大なる参考になつてゐるかしれないのである。⁵⁾

旧満州、「満洲国」における中国語教育特に検定試験に関して、最も永続した語学雑誌はただ『善隣』しかない。その中に珍しい語学資料は、今日日本植民地の語学文化の研究にとって一番得難い資料である。だが、残念ながら『善隣』を創つて編集中枢の中谷鹿二は、彼の履歴、出身、家族などについては、また不明である。

(2) 『満州国語』

満州国語研究会から康德七年五月一日（1940）新京で創刊した語学雑誌であった。半ば公式な雑誌で「満州国」における語学政策、語学検定試験の解説などを掲載した。そのうえ日本語版と中国語版と両方刊行された。終刊は不明であるが、長くても康德十二年（1945）までは疑いはない。この雑誌も散逸した。

筆者が見たのは2年間の20冊（月刊）程で、殆ど長文であり、「満蒙地方の言語に就いて」、「口語運動の展開」、「文体の統一を図れ」など語学政策について論じた内容である。また「蒙古語について」、「日本語の教育について」「支那語の教育について」などの教学法も掲載した。「満語」（中国語）普及の視点から『善隣』と比べれば、『満州国語』は及ぶことができなかつたし、創刊も10年間遅れた。



(3) 『旅順満蒙研究会集報』

大正四年二月（1915）、旅順にあった旅順満蒙研究会から創刊した。中に「支那語・時文科」の頁を設けた。投稿者は当時の関東州の高等法院通訳官谷信近（明治十六年七月旧東京外語漢語学科卒）であった。内容は「眉前浅話」、称呼篇、接見問答、使令会話。また時文では、語帖・実用商業文例・広告・公文を順次誌上で講義し、後に裁判用語集を掲載、また言文研究欄を設けて言文一致の文や虚字用例なども掲載した。また岡本正文『支那語教科書』の木全徳太郎訳の訳解本の一部も掲載した。在満日本人の中国語を養成する目的として努力したが、大正八、九（1919、1920）年ごろ同会の解散により、この雑誌も自然消滅した。

3、掘り起こした語学書籍

旧「満州」時代に出版された語学雑誌でも本でも、その時に『急救篇』や『支那語』

『満州読本』など教科書以外、再版するチャンスは極めて少ない。以下、筆者が苦勞したが、ようやくのことで収集できた本である。

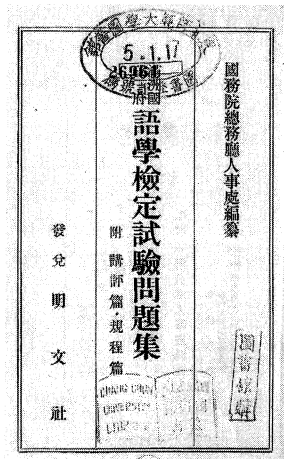
(1) 『満洲国政府語学検定試験問題集・附、講評篇・規程篇』、絶版。

國務院総務庁人事処編、大連明文社、康德四年(1937)3月B5 205頁(日本語の検定問題を除いた)

内容

日本語と満洲語(中国語)の検定試験問題の過去問題で、3級、2級、1級、特級の等級に分類している。

附、講評篇の内容は検定委員会の委員達の受験生に対するコメントである。例えば、検定試験の目的、成績の評価、よく間違える発音や、文法など。規程篇は語学検定試験規程、語学検定試験奨励規程、願書などである。



(2) 『満語華語検定試験の受け方とその準備』、絶版。

荻山貞一著、新京東亜書院、昭和19年(1944)、B6、270頁。

内容

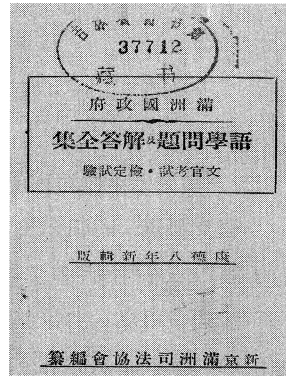
受験方法、受験上の心得が記載されている。満洲国政府、満洲中央銀行、満洲電信電話、満洲炭鉱、大陸科学院、満鉄、北支那開発、関東局など17機関昭和十七、十八年の検定試験問題がある。さらに家庭、渡満、健康、天気、日満関係などテーマ別にする模擬試験問題もある。

(3) 『満洲国政府語学問題及解答全集文官考試・検定試験』、絶版。

新京満洲司法協会編纂、康德8年(1941)1月初版。B6、282頁。(138 - 258の計120頁は、日本語の検定試験問題である。)中国語の検定試験の問題は120頁ある。

内容

康德五、六、七年の満洲国政府文官語学検定試験問題及解答。「語学試験関係法令」を付録している。



(4) 『満洲帝国考試年鑑』、絶版。

新京満洲司法協会編纂、康德10年(1943)3月初版。B6、282頁。

内容

満洲国康德九年における各種試験案内、試験制度概要、試験委員担当科目、実施状況、合格者名簿、合格者の感想などを掲載している。満洲国の医師、教師、記者、技術者、無線通信士、大学高等専門学校、等の試験問題がある。



(5) 『内地、朝鮮、台湾、関東庁 巡査受験学科独習』、1箇所の図書館のみ所蔵されている。

植木野金作編著、松栄堂書店、昭和8年(1933)11月。B6、606頁。

内容

国語科、作文科、算数科、地理科、歴史科、口述試験、最近各地問題があり、受験の心得、答案の書方などが付録されている。

- (6) 『語学検定模擬試験問題集』、1 箇所の図書館のみ所蔵されている。

幸勉著、昭和九年（1934）六月、大阪屋号書店、上下 2 冊、B5、計 604 頁。

内容

等級別の、3、4 級レベルの中国語検定模擬試験問題で、計 301 回。

- (7) 『康徳五年度満洲国政府語学検定試験満語・昭和十三年度満鉄語学検定試験支那語・昭和十三年度関東局支那語 筆記試験問題並解説』、1 箇所の図書館のみ所蔵されている。

大連「善隣」主幹中谷鹿二編訳、大阪屋号書店 昭和十四年（1939）B6、106 頁

内容

満洲国政府語学検定試験満語の 3、2、1 級問題と答案。満鉄語学検定試験の 4、3、2、1、特級問題と答案。関東局支那語奨励試験の乙種、甲種と解釈。

- (8) 『満洲国大学専門学校入学試験問題解説・附、入学須知』、1 箇所の図書館のみ所蔵されている。

福士匡・岩澤巖共著、康徳六年（1938）八月初版、奉天東方印書館、B6 263 頁。

内容

当時、満洲にあった各大学、専門学校の入学試験問題。学科は数学、地理、医学、英語などに分類、等級別になっている。附入学案内、試験科目表など。

- (9) 『満洲国政府語学検定試験問題模範解答集』、1 箇所の図書館のみ所蔵されている。

民生部教育司編、康徳八年（1941）、満洲帝国教育会発行。B6、計 192 頁。（中に 50 頁を占める日本語に関する試験問題がある。）

内容

康徳五年（1938）—— 康徳七年（1940）日本語と満洲語（中国語）における検定試験問題及びその回答。模範解答には註訳、注意を付している。規程篇には語学検定試験規程、津貼支給規定、受験願書等がある。

- (10) 『支那時文講義・附録・支那語及び支那時文試験問題集』、東京文求堂、石山福治 編集、大正九年（1920）

内容

全書 162 頁。その後ろ「支那語及び支那時文試験問題集」を附録し、27 問題、19 頁、B 5

近年来、日本では多くの旧「満州」時代の書籍をコピー再版している。わりに大型で、多巻の本として次のようなものが挙げられる。『満州調査月報』、開明出版；不二出版社 1978 - 1987 年のコピー版（コンパクトフィルムもあり）；『満鉄史料シリーズ』、龍溪出版社出版 1986 - 1992 年コピー版；『満州文献目録集』地久館出版 1985 年（満州事情案内所編『満州関係史料集成』、昭和十八年のコピー版）；参謀本部編の『満州事変作戦経過概要』、昭和十年、巖南堂書店 1972 年コピー；大蔵省管理局編『日本人海外活動の歴史調査——満州編』第 1 - 4 冊、1985 年コピー；植民地教育に関する資料のコピーも多くある。例えば、「満州国」教育研究会編集の『「満州国」教育資料集成』（3 期、計 27 巻、エムテイ出版 1992 - 1993 年）。これらの大量な復刻された書物の中には、本文に述べる雑誌と本はない。

注

- 1) 筆者と橋本氏の対話
- 2) 那須清 『旧外地における中国語教育』 不二出版 1992 年 p36
- 3) 六角恆廣 『中国語教育史稿拾遺』 不二出版社 2002 年 p262
- 4) 『善隣』 第 6 年 6 号、p12
- 5) 『善隣』 第 10 年 8 号、p26